ラテン語とフランス語 3

名言・金言による比較言語学

秋山 学

今月はローマ最大の詩人，ウェルギリウス（B.C. 70–19）を題材にお話ししてみたいと思います．ウェルギリウスは，『牧歌』（B.C. 42–37，全10歌），『農耕詩』（B.C. 37–29，全4巻），そして『アエネイス』（B.C. 29–19，全12巻）という，叙事詩韻律による三つの作品を遺しています．『アエネイス』は，すでに生前より国民的詩人としての地位を築いていた作者が，オクタウィアヌスのもたらした「ローマの平和」を背景に歌ったもので，ギリシアの叙事詩人ホメロスによる『イリアス』『オデュッセイア』を模倣しながらも，それに比肩する評価を獲得しえた，屈指の「古典」です．

『アエネイス』第1巻は，トロイア戦争により焦土と化した都トロイアを脱出し，同胞の残兵たちを率いた英雄アエネアスが，新しき都ローマを目指しながらも，シチリア島を出航した後に暴風雨に見舞われ，逆に北アフリカのカルタゴへと漂着する，というシーンから始まります．母ウェヌスの化身である女狩人の指示に従い，カルタゴの女王ディドの館に向かう途上，アエネアスと供のアカーテスは，建設途上のユノ神殿を目の当たりにします．何とそこに描かれていたのは，自分たちが戦って敗れたトロイア戦争の場面でした．アエネアスは涙にむせびます（*Aeneis* I. 459–463）．

［原文］Constitit et lacrimans, ‘Quis iam locus’ inquit ‘Achate, / quae regio in terris nostri non plena laboris? / en Priamus, sunt hic etiam sua praemia laudi, / sunt lacrimae rerum et mentem mortalia tangunt. / solve metus; feret haec aliquam tibi fama salutem.’

［仏訳］Il s’arrete et verse des larmes: ‘Quel pays, Achate, quel canton de l’univers ne sont pas remplis de nos malheurs? Voici Priam! Ici même, les belles actions ont leur recompense; il y a des larmes pour l’infortune, et les choses humaines touchent les cœurs. Ne crains plus: cette renommée, n’en doute pas, nous apportera quelque chance de salut’.

［拙訳］（アエネアスは）歩みを止め，涙を流しながらこう語る．「アカーテスよ，いったいいかなる土地，この地上のいかなる場所が，我らのなした偉業に満ちていないことがあろうか？ 見よ，プリアモスがいる．ここにもまた，武勲には報いがあり，事蹟への涙があって，死を免れぬ人間の業は心に触れる．恐れを棄てよ．この名声は汝に

いかばかりか救いをもたらすだろう」.

引用部の一節 'sunt lacrimae rerum et mentem mortalia tangunt' は，ウェルギリウスによる詩句の中でも，「幼子の誕生」を歌って「異教徒の預言者」との異名を彼が得ることになった『牧歌』第4歌の一節 (ll. 4–10) と並び，非常に有名なものです．この部分，ビュデ叢書のフランス語訳では l'infortune あるいは les choses humaines といった形でその内容を説明的に訳さねばならないところに，ラテン語原文ではそれぞれ 'res' (事物)という多義名詞，あるいは 'mortalia' (死すべきもの)という，形容詞中性複数形を抽象名詞化したものが用いられています．ラテン語は，語彙数がそれほど多い言語ではありません．そのぶん，一語彙の語義が多岐にわたるほか，形容詞の中性複数形は様々な内実を含む場合があります．このようなラテン文法に由来する何とも言えぬ奥ゆかしさが，この一行の憂いに満ちた美しさを深めているのでしょう．

また仏語訳では verse des larmes の後にすぐ引用文が続き，言説動詞が省かれていますが，ラテン語原文では，「涙を流す」には lacrimans と現在分詞形を用い，引用文に関しては inquit という言説動詞が導くという正確な構文になっています．引用原文2行目 'quae regio … nostri non plena laboris?' では，non plena が regio を修飾し，nostri laboris は plena の要求する属格に置かれています．これは訳文にもあるように，ちょうど仏語の être rempli *de* ～，英語の be full *of* ～ の構文に相当しますね．

ところで，「涙」が古典文学作品の展開に大きく関わる箇所としてすぐに想い起こされるのは，『オデュッセイア』第8巻の後半部です．嵐により漂着した島で，オデュッセウスはファイアケス人の王アルキノオスから歓待を受けます．いまだ旅人の名も明らかでないうちに，王は盲目の歌人デモドコスを招じて歌語りをさせます．ところが，それはトロイア戦争における都トロイア落城のくだりでした．オデュッセウスは秘かに涙を流します．素性を問われた彼は己の身を明かし，こうして『オデュッセイア』第9巻から12巻にかけて，主人公による「一人語り」が始まります．そのうち第11巻には，ウェルギリウスも『アエネイス』第6巻に取り入れた「冥府下り」のモチーフが含まれています．このアルキノオスの館の場面は「聴覚」に由来する落涙ですが，上に引いた『アエネイス』のカルタゴ・ユノ神殿の場面は「視覚」が基になった落涙だと言えるでしょう．ちょうどホメロスが『オデュッセイア』で「一人語り」の前に落涙の場面を置き，「語り」を聴く耳を聴衆にも備えたのと同様に，ウェルギリウスは冒頭第1巻に「落涙」の場面を置くことにより，それに続くディドの館での主人公による「一人語り」(第2～3巻)を，さらにはこの『アエネイス』全編を「読む」ための視座が読者に備わるよう意図したと言えるのではないでしょうか．

(あきやま・まなぶ)